

大阪商業大学学術情報リポジトリ

「大局将棋」考案の背景と創作過程に関する考察—
各種大型将棋との比較と「天竺大将棋」の影響、なぜ804枚の超大型将棋が作られたのか—

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2018-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古作, 登, KOSAKU, Noboru メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/583

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「大局将棋」考案の背景と創作過程に関する考察

各種大型将棋との比較と「天竺大将棋」の影響、なぜ804枚の超大型将棋が作られたのか

古 作 登

〈1〉大局将棋制作の背景 基にしたのは泰将棋と天竺大将棋、家格を高めるため創案か

日本における大型将棋の発展は平安時代の大将棋、通称「平安大将棋」に端を発するが、鎌倉時代から室町時代に大型化の流れは加速し、摩訶大大将棋（19×19マス、50種192枚）、泰将棋（25×25マス、93種354枚）といった広い盤と駒の種類、数を誇る遊戯が考案された。これらの将棋に関する史料の多くは仏教寺院やその関連の宗教施設で見つかり、大型将棋の考案が仏教や日本古来の神道の思想の影響を受けたことは筆者が以前から複数の論文¹⁾で述べてきたとおりである。

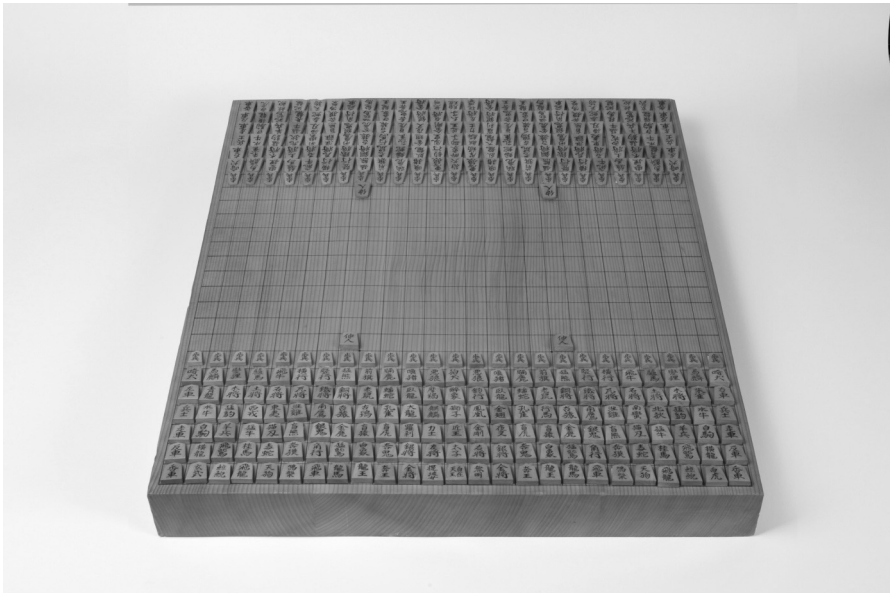


写真1 泰将棋（25×25マス、93種354枚）

大型将棋は室町時代までにはかなりの数のバリエーションが考えられ、中でも中将棋は僧や貴族の間で普及したが、並行して現行の9×9マスの盤を用いる将棋は遊戯時間の短さもあり大型将棋以上に広まった。長かった戦国時代が終わって天下が統一され、江戸時代に入ると1612年、将棋は囲碁とともに幕府から正式に俸禄を受け家元制度が確立することとなった。これは当時の天下人である徳川家康が囲碁、将棋を以前から武将や有力者とのコミュニケーションツールとして重要視していたからでもある。俸禄を受ける囲碁将棋衆（文書では碁打衆、将棋指衆と記載されている）の中で『伝信録』が示す筆頭格は将棋の名手でもあった囲碁の一世名人・本因坊算砂（1559～1623）、次いで算砂の好敵手利玄、三番目に将棋一世名人・大橋宗桂（1555～1634）の名が記されている。算砂と宗桂の現在に伝わっている棋譜は現行の将棋（9×9マス、8種40枚）のみ。家康が戦国武将に褒賞として与えたとされる高級駒もほとんどが「小将棋」（現行将棋とほぼ同じ）の駒なので、安土桃山時代末期には中将棋より小将棋が圧倒的に遊ばれる頻度が増していたことと思われる。

囲碁将棋の家元に対しての俸禄については1612年に算砂、利玄、宗桂らは家康より正式に扶持を得たと以下のとおり記されている。

- 一 慶長十七壬子年、権現様より下置かれ候御切米御書出しの写碁打衆将碁指衆御扶持方給し候事
 - 一 五拾石五人扶持 本因坊
 - 一 五拾石五人扶持 利賢²⁾
 - 一 五拾石五人扶持 宗桂
 - 一 五拾石 道碩
 - 一 二拾石 春知
 - 一 二拾石 仙重
 - 一 三拾石 六蔵
 - 一 二拾石 算碩
- 御切米合貳百九拾石
御扶持合拾五人扶持
- 右亥年分より毎年京枘を以て相渡し彼衆手形を取置き江戸御勘定相立らるべく候、以上
壬子二月十三日
米 清右 判（以下略）

「大局将棋」考案の背景と創作過程に関する考察

文中の権現様とは徳川家康のこと。ここに挙げた俸禄の支給に関する記述を見ると、筆頭の算砂と最も多く対局をしたと考えられる本能寺の僧・利玄（この文書では利賢と記されているが同一人物と考えられる）が次席となる。算砂は宗桂との対局棋譜が残っているように将棋も名手、利玄は後陽成院との中将棋の対局記録も残っており中将棋の名手であったことがわかっている。この二人に続いて小将棋を専門とした宗桂の名は三番目に記されていて、俸禄は同じ五十石五人扶持なので将棋に対する評価は囲碁に準ずるものの、ほぼ同格に扱われたことがわかる。ただし宗桂の子で後に二世名人となる大橋宗古（当時36歳）は相当な将棋の腕前を持っていたはずなのに文中に名がなく、算砂の弟子である道碩（中村道碩・二世名人）は第四席を占め五十石の扶持を与えられている。この文書に記されている名は多くが囲碁師と推測され、当時の囲碁師の需要が将棋師の需要を上回っていたことを示している。ただし囲碁師の多くも将棋でもかなりの腕前であったことは算砂の棋譜や諸資料から明らかで、複数の盤上遊戯に通ずるものが多かったようである。

算砂も宗桂もどちらも五十石五人扶持の待遇ではあるが、算砂や利玄はそれ以前の記録にも残るとおり、以前から有力武家や天皇家とのつながりを持つ僧であった。一方の宗桂は各種資料からは裕福な町人と推測されている。当初の格付けは必然としても100年の歳月を経て、盤上の勝負を生業とするものとして家格でいつの日か囲碁筆頭の本因坊家を上回りたいという思いが大橋家にあったのではないだろうか。事実、将棋家元の三代伊藤宗看（七世名人）は1728（享保13）年に23歳の若さで名人を襲位するが、当時名人になるためには幕府に「献上図式」と呼ばれる詰将棋集を納めたのち、というのが慣例だった。図式献上前の名人襲位はそれだけ実力を高く評価されていたのであろう。もっとも6年後に献上した『象戯作物』（通称『将棋無双』）は100局の詰将棋が載っており、その難解さもあって江戸期のみならず現代においても『将棋図巧』（宗看の弟・伊藤看寿の作品集、1755年献上）と並び、詰将棋作品集の最高傑作と呼ばれている。一方囲碁の家元四家（本因坊家、井上家、安井家、林家）では、詰碁集の創作はされても「献上図式」の制度化はされておらず、1713年に名人碁所の四世井上因碩が完成させた『囲碁発陽論』は現在での評価も高い作品集だが井上家門外不出の書とされ、世に出たのは明治時代を迎えてからであった。

江戸中期の囲碁界は人材不足に悩まされ、五世本因坊道知が1726年に没したのち傑出した棋士が出ず、名人空位の時期が存在した。宗看と同時代に生きた本因坊家当主は七世秀伯で段位は六段。同じ盤上競技で種目は違っても棋士としての格では当時将棋家が囲碁家より明らかにまさっていた。こうした背景もあって、1737（元文2）年に宗看は「碁将棋名順訴訟」³⁾を起

こし対等の席次（筆頭格が年により交代する規則の制定）を願ったが、当初将棋家の後ろ盾となり政治的後押しをしていた寺社奉行で囲碁将棋師の担当だった井上河内守⁴⁾が訴訟の最中に急逝し、囲碁将棋界を管轄する後任の寺社奉行大岡忠相が伝統を重んじたため訴えは退けられた。

宗看、看寿の完成度の高い献上図式は、なんとしても将棋家元の地位を作品で認めてもらおうという気持ちの表れではないだろうか。その後、伊藤家とは当初から姻戚関係の続く大橋家（宗看の弟で看寿の兄が八代大橋宗桂）だが献上図式は1787年、九代大橋宗桂（八世名人）の『将棋舞玉』を最後に、1799年に名人を襲位した大橋分家の六代大橋宗英（九世名人）以降は作られなくなった。「大局将棋」の創作の背景には、江戸時代中期から後期にこれまで最大の泰将棋をしのぐスケールの将棋を作ること認められ、家格を高めようとした大橋家の強い思いがあったと考えられる。

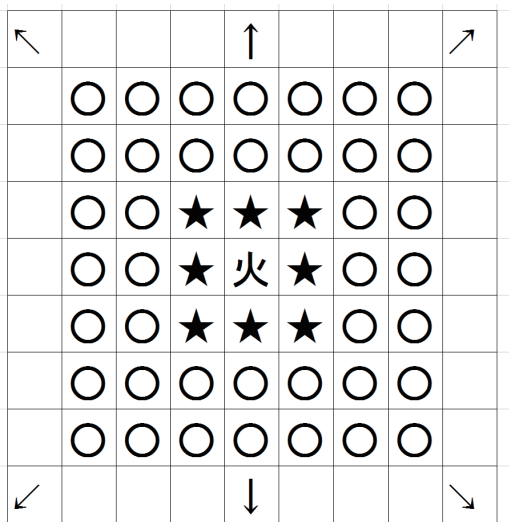
〈2〉天竺大将棋について 極めて強力な駒の導入が特徴も傍流にとどまる

大局将棋に影響を与えた大型将棋としてそれまで最大の泰将棋以外に「天竺大将棋」の存在があげられる。現存する資料によれば天竺大将棋は鎌倉時代までに成立したとされる大将棋（15×15マス、29種130枚）あるいは中将棋（12×12マス、21種92枚）の拡張形と考えられている。盤のサイズは少しだけ大きい16×16マス、駒は36種156枚になった。

天竺大将棋が大将棋や室町時代に流行した中将棋と大きく違うのは歩兵の前の最前列に位置していた「仲人」の駒の代わりに新たに「犬」が配置され、ほかに「飛将」「角将」「大将」「副将」「横兵」「縦兵」「車兵」「火鬼」「獅鷹」「奔鷲」の駒が追加された。これらの駒の多くが室町時代までに成立した他の大型将棋の駒とは違い、極めて動きの強い駒であることだ。天竺大将棋が文献に残っているのは江戸時代に発行された『諸象戯図式』（17世紀末）、『象戯図式』（18世紀）が代表的で、後者は伊藤宗看が幕府に献上したものとされる。『象戯図式』に駒の配置と動き方が記載されている将棋は小象戯（現行の将棋）、中将棋、大将棋、天竺大将棋、大大将棋、摩訶大大将棋、泰将棋の7つ。ほかにもいくつかのバリエーションがあることが付記されており、大局将棋に関連する内容も存在する。よって大局将棋の創作は遅くとも江戸中期、宗看の時代に始まったと思われる。

◎火鬼（かき）

天竺大将棋で初めて導入された駒。「獅子」の動きを拡大し「玉」の動きで3手（獅子は2手）指した位置（図の○の位置すべて）に移動できるだけでなく、タテと斜めにはどこまでも進む（矢印方向）ことができる。ただしいずれの場合も駒を飛び越えることはできない。極めつけは移動先で★の位置にある敵の駒は「焼く」ことで一度に取ることができるというもの。まさしく「火」の動きそのもので、一度移動することにより最大9個の敵駒を盤上から消滅させることが可能。



図一 天竺大将棋の火鬼の動き

天竺大将棋に新たに導入された駒の例として「火鬼」の動きを示した。他にも「大将」など従来の駒に比べ格段に強い駒が追加されている。遊戯の改良の際、こうした従来の駒の性能に比べて強すぎる駒をいっぺんに増やせば、それまであった駒の価値が損なわれ、長年遊ばれ親しみを持って接してきた従来の駒は取られるためだけや、強い駒の盾としてのみの存在価値になってしまう。こうした変更によりゲームバランスが乱れて、伝統も失われ、ともすればプレイヤーの興味が低下する可能性は少なくない。文献などで天竺大将棋が遊ばれた記録が乏しいのは遊戯としての完成度が高くなかったからと考えることもできるだろう。

〈3〉 大局将棋で追加、動きが変更された主な駒を検証——成立時期は江戸後期か

20世紀末に発見された江戸期から明治初期の将棋に関する膨大な資料、通称『大橋家文書』の中には「大局将棋駒」と表題が記された箇所があり、遊戯史研究家の梅林勲によりルールの解釈が行われた。「大局将棋」に関して詳しく書かれた最初の著作は1997年に刊行された「世界の将棋」(将棋天国社)で、そこには梅林の解釈による駒の動きが記されている。大局将棋の実物が初めて復元されたのは2001年、駒師の熊澤良尊に制作を依頼し、数カ月の制作期間を経てアミューズメント産業研究所で展示され現在に至る。

『大橋家文書』は現代に発見されたものだが、江戸時代から明治時代までの将棋の定跡書や詰将棋集、また大橋家にまつわる手紙や書状など雑多な内容が含まれており、時系列順に整理されているものではない。「大局将棋駒」に関する文献も駒の名称と配置に動きが点で示されているだけのものであって詳しいルールや創作の由来、どこかに献上したなどという説明は一切ないため、江戸期に実際に駒や盤が作られたどうかは不明で、「大橋家文書」の他の資料の中にも記述がなく、詳細に関してはわかっておらず「大局将棋駒」が試作途中の設計図だったという可能性もある。本項ではこれまでなされなかった、駒の名称や動きから創作過程に関して推察していく。

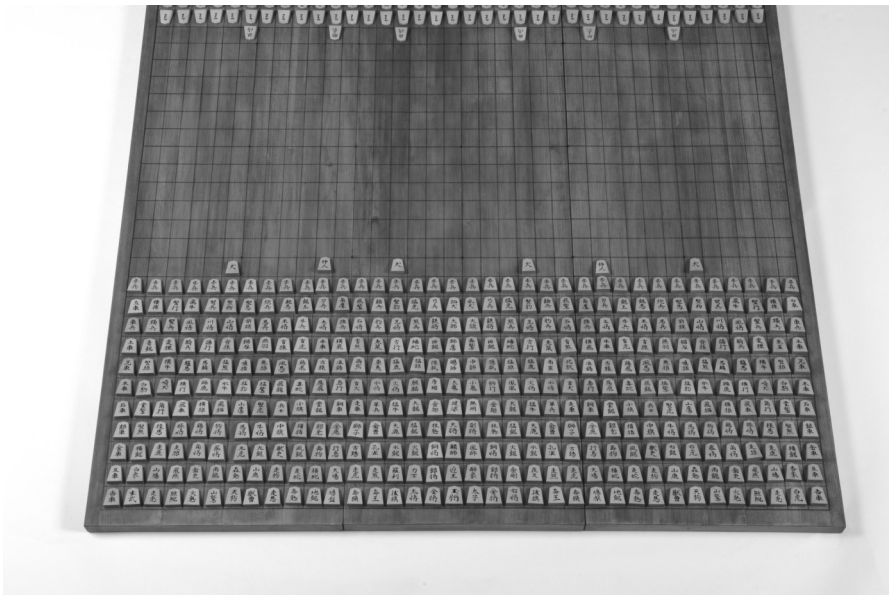


写真2 大局将棋 手前に映っている自陣の駒だけでも402枚あり泰将棋の総駒数を超えている

「大局将棋」考案の背景と創作過程に関する考察

大局将棋はそれ以前の時代最大の泰将棋（25×25マス、93種354枚）より駒の種類も数も2倍以上という、それまでにない大規模な拡張を遂げている。平安時代に大型将棋の流れを作った原点ともいえる「酔象」の導入に関しては、『仏所行讃』を代表とするいくつかの仏典に記された「酔象調伏伝説」の影響が極めて強いと考えられるが、その最終形として室町時代までに完成したのが泰将棋、さらに拡張しようと江戸時代に考案されたのが大局将棋といえよう。

当初、玉将、金将、銀将、桂馬、香車、歩兵の6種36枚しかなかった「平安将棋」に酔象が追加されて以降、9×9マスの将棋はシンプルな「小将棋系」として遊ばれ続け、飛車と角行を加えた40枚制の将棋は取った相手駒の再利用ルールという革命的改良で遊戯性が高まり幅広い階層に広まったが、「大型将棋系」も駒の数を増やし改良を重ねる流れは継続し、室町時代には大将棋を簡略化した中将棋が貴族や僧侶の間で流行した。文献に残る最初の大型将棋である平安大将棋（13×13マス、69枚）に始まる大型将棋発展の背景には駒の命名の由来からして、仏教や日本古来の神道、民間信仰があったと推定できることは筆者が複数の論文で述べてきたとおりである。

鎌倉時代に成立したとされる150枚制の「大将棋」から少し経ったところに「天竺大将棋」（16×16マス、156枚）が考案され、大局将棋にもいくつかの駒が継承されている。大将棋の遊戯記録はほとんど残っていないが、大型将棋も初期のものは実際に対局をするために作られていたことは間違いない。だが泰将棋までに至る過程において、遊戯は小将棋あるいは中将棋、大型将棋は拡張とともに象徴的な意味が増すようになってきた。

複数作られた大型将棋の中でも天竺大将棋は水無瀬神宮に残る「象戯図」（写真3）に駒の配置とルールが記載されている室町時代までのいわゆる「六将棋」⁵⁾には入っておらず傍流といえるが、複数の資料で現在に伝わっていることから民間伝承で一部の人々に遊ばれていたと考えられる。梅林らによれば天竺大将棋は鎌倉時代には完成したとされる大将棋（130枚制）が基とされ、強力な働きの駒の比率が多い。天竺大将棋の中で特徴的な駒としてあげられるのが前述の「火鬼」や「大将」、これらは大将棋や中将棋で最も強力とされる「獅子」の働きを数段強力にしたもの。ほかにも「獅鷹」、「奔鷲」といった強力な駒が追加されているが「六将棋」に入れられなかったのは、ゲームバランスが崩れ遊ばれなかったからと推測される。盤の大きさの違いが1路で駒数の増加も26枚とさほど多くないため、大将棋成立からそれほどの年月は経っていないはずだが、天竺大将棋の成立時期を特定できる資料は発見されていない。

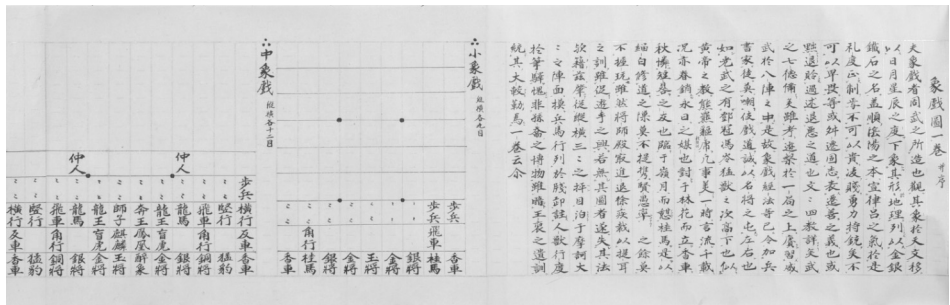
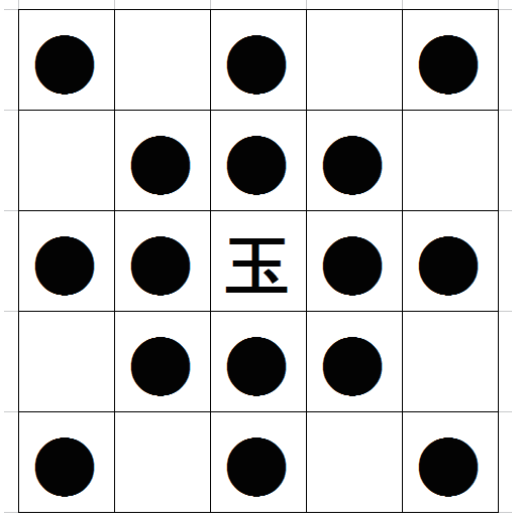


写真3 水無瀬神宮所蔵「象戯図」複製 小將棋から泰將棋まで6種将棋の由来について記述もある

続いて大局将棋で追加された主な駒の名称と働きをとりあげ成立の由来について検証する。

◎玉將 泰將棋では初期配置で玉將が存在せず自在王に置き換えられたが大局将棋で再び取り入れられた。泰將棋の自在王（自在天王）から性能は抑えられているが、他の大型将棋の玉將に比べると動ける範囲が拡大している。



図一2 大局将棋の玉將の動き

◎犬 大局将棋と天竺大将棋に存在する駒。最前列に配置されているところは他の大型将棋の「仲人」（ちゅうにん）と似ているが、天竺大将棋では動きが「犬」の文字にあわせて「逆

「大局将棋」考案の背景と創作過程に関する考察

Yの字」に変化しているのが特徴。ただし、大局将棋では図-4のように動きが違う。他の駒でも名前は継承しても動きが違うものは数多く見られ、ゲームバランスを考慮したというよりは、名称が違って同じ動きをする駒をできるだけ減らす⁶⁾ため、変更が加えられたのだろう。最前列の駒をほとんどの大型将棋に採用されている「仲人」だけでなく天竺大将棋の「犬」を加えたのは、傍流の天竺大将棋の流れを重んじた大橋家の趣向と考えてよいだろう。

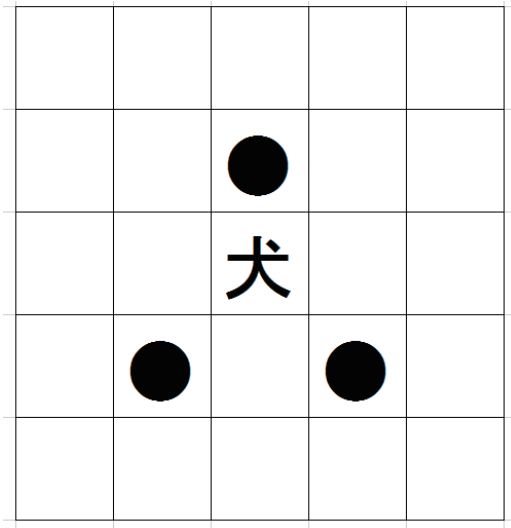


図-3 天竺大将棋の犬の動き

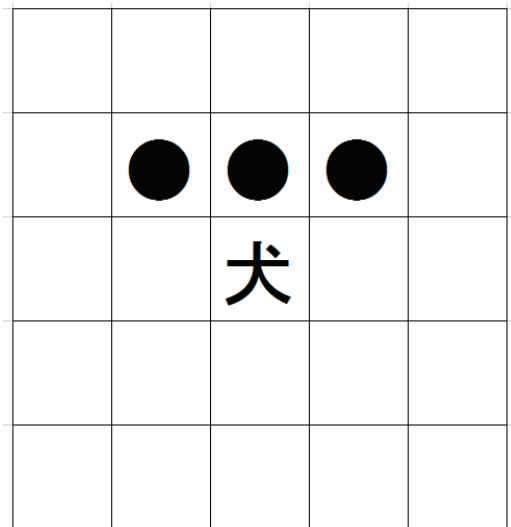


図-4 大局将棋の犬の動き

◎弩兵（どへい） 大局将棋で初めて追加された駒。「弩」の文字は強い弓を意味し大局将棋で初めて追加された文字。武器の名称の下に「兵」の文字を追加し駒の性質を表した。「刀兵」「鎗兵」（そうへい）「騎兵」も同様の意図で作られた駒と推測される。

◎豎狗（しゆく） 大局将棋で初めて追加された駒。「豎馬」（しゅば）「豎豹」（しゅひょう）と同じ系列。「豎」の文字は上下や前後、タテを意味し「豎行」の駒は中将棋～泰将棋のすべてに存在するのでタテに働きの強い駒として種類を増やしたと考えられる。

◎大旗（だいき） 大局将棋で追加された駒。「小旗」「前旗」「後旗」と「旗」の前に大ききや位置を表す文字を追加している。動きはかなり強力。

◎風将（ふうしょう） 大局将棋で追加された駒。「弓将」（きゅうしょう）「雑将」（ざつしょう）「炮将」（ほうしょう）「弩将」（どしょう）「刀将」（とうしょう）「副将」（ふくしょう）「山将」「川将」「馬将」「牛将」など古来使われてきた「将」の頭に文字を当てはめて命名、動きが定義されたと思われる。

◎山鳩（さんきゅう） 大局将棋で追加された駒。「大鳩」「山鷹」など鳥の名前を追加した駒も同系列。

◎吼犬（こうけん） 大局将棋で追加された駒。犬の文字が下に付くため「狛犬」を基に作られたと考えられる。動きも「狛犬」に準じてかなり強力。

◎走馬（そうま） 「走狗」「走蛇」「走虎」「走熊」など生き物の名前の前に「走」の文字を加えただけの駒は多く、いずれも大局将棋で初めて追加された駒である。駒の動きは「走」の文字に合わせて前後には何マスも動け、成った時の動きが種類によって違う。

◎右虎（うこ） 「左虎」「右龍」「左龍」も同系列。初期配置の右左を意味する文字と、それまでの各駒に使われていた文字を組み合わせたものと推測できる。

◎森鬼（しんき） 「鬼」の文字を使ったのは泰将棋、大大将棋にも存在する「奔鬼」にな

ぞらえたのだろう。「火鬼」「林鬼」も同系列。

◎木車（もくしゃ） 「石車」「金車」「銀車」も同様に車の前に材質を表す文字を追加した。

◎獣吏（じゅうり） 「獣」の文字が将棋に用いられたのは初めて。「獣曹」も同系列。

ここまで取り上げてきた駒の名称で明らかにわかることは、泰将棋やそれ以前の大将棋と違って新しく導入された駒の名称は仏教や神道と関連付けられたものではなく、ほとんどが単なる文字の組み合わせで作られていることである。日本の古代、中世において将棋の改良は仏教寺院を中心に行われ、長年受け継がれてきた大型将棋の集大成といえる「泰将棋」にさらに新たな要素を加えることは難しかったのだろう。また大局将棋創作にあたっては初代大橋宗桂が町人出身であり、家元となった後の大橋家も遊戯の専門家の家系であって、僧籍ではなく本因坊家のような僧名⁷⁾も持っていない。したがって宗教的な要素が取り込まれる可能性は低かったと思われる。

〈4〉「大局将棋」の遊戯性の実戦による検証

ルールが考案された後、実際に「大局将棋」が遊ばれることはあったのだろうか。筆者は「泰将棋」同様、権威を表すための象徴的存在で、指されることはなかったと考える。2004年、フジテレビのTV番組「トリビアの泉」の企画で大局将棋をプロ棋士同士が対局してみたが、睡眠など休憩をはさみ3日経っても詰ますところまではいかず投了によって決着した。番組発表の記録によれば、対局時間は3日間に及び、のべ32時間あまり、総手数3805手。局後の対局者の感想も「とにかく疲れました」、「もう二度と指したくないです」といった否定的なものであった。筆者も2012年、NHKの番組「金とく」で指し掛けになることを承知で5時間あまり、600手以上対局してみたが、開始から数時間経過しても自陣の下部に並べられた駒を前線に進めるまで至らず、さらに駒の動きを理解することも難しく（もちろん駒を動かす際はルールブックと照らし合わせながら着手した）600手も経過しているのに勝負の先行きは全く見えず、指し手の善悪よりも早く駒を減らしてわかりやすい局面にしたいという気持ちだ

けで、対局に臨んで楽しめる感じはほとんどなかった。こうしたことから、大局将棋がルールを整備した上で駒の配置の壮観さを見せるため、将棋家元の権威を示すために作られた将棋であることは確かであろう。

〈5〉まとめ

ここまで大局将棋の成立の背景から、天竺大将棋の影響と従来の大型将棋の継承、また遊戯性について考察してきた。結論としては、大局将棋は大橋家が将棋家元の権威を高めるために、宗教性を追究した泰将棋に、「六将棋」に取り入れられることのなかった傍流で強力な駒の多い天竺大将棋の駒を加え、さらに「兵」「鬼」「走」「獣」といった文字の導入と組み合わせで種類を増やし、駒の動きをできるだけ重複しないよう新たに考えてルールを整備したものであると考えられる。成立時期は『諸象戯図式』の刊行前後、将棋家元が囲碁四家との席次を同格にしようと臨んだ18世紀後半と推定できよう。盤の大きさや駒の配置や働きから、実際に遊戯することはほぼ考慮されずに作られたものである。また『諸象戯図式』以外で駒の動きや配置が示された唯一の資料「大橋家文書」のほかには当時の文書に「大局将棋」が登場していないことから、大橋家の中でも大局将棋は構想のみにとどまり、盤駒の実物は作られなかったの可能性が高いのではないだろうか。

〔注〕

- 1) 仏典の文言と将棋駒の名称の共通点について論述した「平安時代の『酔象』駒発見から日本将棋の進化過程を推測する」2014年大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要に収録の論文が代表的
- 2) 利賢は利玄と同一人物と考えるのが現在の囲碁史研究者の中で大勢である。同様に二世名人の道碩のことを道石と表記されている文書も存在する。
- 3) 訴えが退けられたのち筆頭格は本因坊秀伯、次席が伊藤宗看、三席が林門入、井上因碩、安井仙角、四席が大橋宗桂、大橋宗珉（以下略）とされた
- 4) 本名は井上正之。宗看の門人で五段を許されていた
- 5) 小将棋（現行の将棋）、中将棋、大将棋、大大将棋、摩訶大大将棋、泰将棋の6種の将棋を指し、複数の文献に駒の働きや配置が記されている
- 6) 大局将棋の初期配置における「犬」と「鉄将」の動きは同じで成った時の動きが違う
- 7) 歴代本因坊は初代算砂の日海、以下二世日縁、三世日勝と法華宗の法名を与えられた。七世秀伯の法名は日宥

〔参考文献〕

- 梅林勲・岡野伸『世界の将棋』（初版）将棋天国社 1997年
木村義徳『持ち駒使用の謎 日本将棋の起源』日本将棋連盟 2001年

「大局将棋」考案の背景と創作過程に関する考察

- 原実（訳）『大乘仏典13 ブツダ・チャリタ（仏陀の生涯）』中公文庫 2004年
岡野伸『東洋の将棋』大阪商業大学アミューズメント産業研究所叢書第8巻 2007年
福井正明『囲碁古名人全集』誠文堂新光社 2007年
増田忠彦『囲碁 語園』大阪商業大学アミューズメント産業研究所叢書第・刊 2012年
増川宏一『日本遊戯史』平凡社 2012年

